

テクノス通信 VOL. 1

May.2009



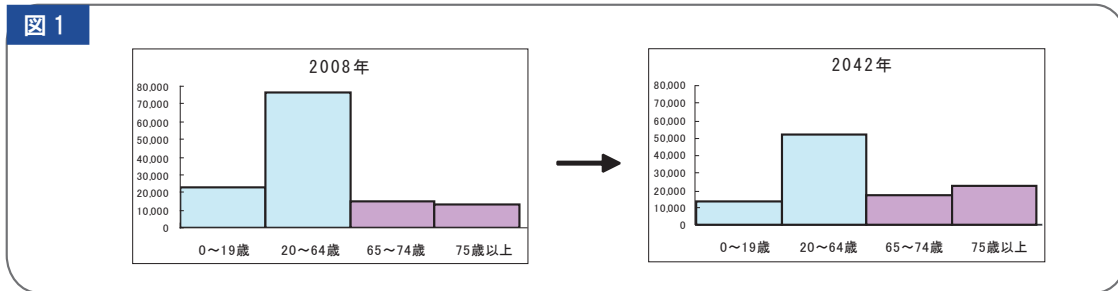
「病院や高齢者施設で離床センサーの導入が進むワケ」

転倒・転落事故の背景

●日本社会の高齢化＝入院患者の高齢化

日本では現在 5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者であり、2012 年にはいわゆる「団塊の世代」が 65 歳を迎えることにより、高齢者人口が 3,000 万人を超え、2042 年にピークを迎えるという予測がされています。

社会全体が高齢化に向かうということは必然的に入院患者も高齢化が進むということであり、医療現場ではそれに伴う様々な対応を迫られています。

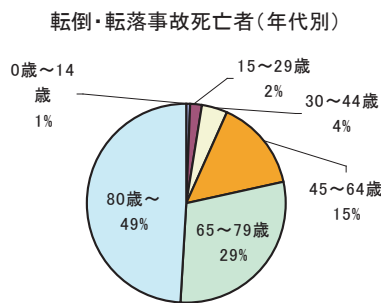
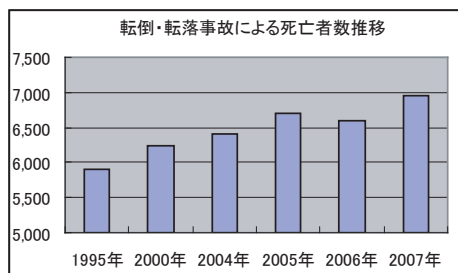


資料：国立社会保障・人口問題研究所

●転倒・転落事故は社会問題

厚生労働省が発表した、2007 年度の転倒・転落事故による全国の死亡者は 7 千人近くに上り、その中でも 65 歳以上の高齢者が 8 割弱でした。死亡事故の内容は、同一平面上でのスリップ・つまづき等が 6 割弱を占め、高齢者がいかに転倒しやすく、また、転倒してしまうものかということを表しています。

図 2



高齢者の転倒・転落事故の内容

- 1位：平面上での転倒 -59.2%
- 2位：その他の転落 -10.96%
- 3位：建物又は建造物からの転落 -10.8%
- 4位：階段などからの転落及び転倒 -9.4%

資料：厚生労働省・人口動態調査

病院での転倒・転落事故の現状

当社が 2007 年度に 83 病院対象に行った調査によると、医療事故における転倒・転落事故の割合は平均 25.9%でその内最近の事故件数が減少していると答えたのがわずか 7%でした。

事故の件数が減らない大きな原因は、高齢入院患者が増えているため必然的に事故件数も増加します。

また、転倒・転落は医療提供側のミスというより患者の自発的な行動によって起きる患者要因の影響が強いことも増加の原因に挙げられます。

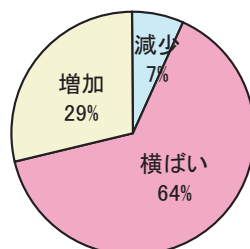
例えば、転倒・転落リスク度が高い患者へ排泄時のナースコール指導をしても、「排泄だけは自力で…」という気持ちからコールに頼らずに行動した結果、転倒してしまうケースもあります。また、患者自身に「したい行動」と「できる行動」のギャップがあり、そのことが転倒・転落に結びつくことも多いようです。

事故を防ぐ一手段として、患者が不用意に動かないようにすることがあげられますが、「自分で動きたい」という行動を抑制・拘束することは人間の尊厳を傷つけるだけではなく、身体機能を低下させるなど高齢者の生活の質を損なう危険性が指摘されており、いかに患者の行動を抑制せず、転倒・転落を減らせるかが鍵となります。

図 3

転倒・転落事故
||
医療事故全体の 25.9%

最近の転倒・転落事故発生件数の推移は？



【増加・横ばいの要因】

- ・高齢入院患者の増加
- ・入院による生活環境変化に伴う痴呆の発症
- ・患者のアセスメントの変化に対応できていない。
- ・人的対策の限界

【減少の要因】

- ・リハビリ科との連携により、筋力 up 訓練を行った
- ・離床センサーの活用

●離床センサーの役割

看護師さんは、患者さんの療養生活のお世話だけではなく、診療・治療の補助、看護記録や物品管理などたくさんの仕事を毎日こなしています。
しかし、転倒・転落は患者さんが自由に行動する限りいつでも起こりうるので、他の患者さんのケアをしている時でも、巡回をしている時でも、常に複数の患者さんの転倒・転落リスクを考えて仕事をしなければいけません。

「患者さんの行動を知らせる『モノ』があれば、看護師さんも安心だろうに…」

入院中の開発者のそんな想いから生まれたのがテクノスジャパンの離床センサーです。

離床センサーは、患者さんの特定行動を看護師さんにお知らせすることはもちろんですが、センサーの報知により患者さんの予想外の動きや癖に気付いたり、仮に転倒したとしてもそれにいち早く対応できるなど、看護師さんの業務を支援する道具でもあります。

また、患者さんにとっては、「拘束・抑制」されない自由と安全な療養環境をサポートする役割を担います。

看護師さんには「安心」を！ 患者さんには「安全」を！

安心

看護師さんの業務支援の道具

- ・危険行動を察知し転倒・転落事故を未然に防ぐ
- ・予想していなかった危険行動の発見
- ・事故が起こった際の早期発見（重大化を防ぐ）
- ・危険予知能力の向上
- ・精神的緊張の緩和

安全

患者さんの療養環境サポート

- ・行動が抑制されない自由
- ・気付かないところで、見守りケアを受けられる安心



●センサーを効果的に使うためには

離床センサーは、全ての患者さんに、24時間必要なものではありません。

よって、「必要な患者さん」に「適合した離床センサー」を「正しく使用」した時に、最大の効果を発揮します。

センサーの有用性 = 「製品」 + 「使い方」 + 「適合」の総合点

【対象者 + 知りたいタイミング別に見る適合センサー一般例】

対象者	知りたいタイミング	適合するセンサー
		
<ul style="list-style-type: none"> ・1人で行動すると転倒の危険性がある ・徘徊行動がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベッドから床に足をおろした時 	 コールマット
<ul style="list-style-type: none"> ・床敷きのセンサーを飛び越える、気にする ・床敷きセンサーでは報知タイミングが遅い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベッドの端に寄った時 ・ベッドの端に手を着いた時 ・足から滑り降りようとした時 	 サイドコール
<ul style="list-style-type: none"> ・ベッド柵を抜いたり、乗り越えたりしてしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベッド柵を握って起き上がった時 ・ベッド柵を越えようとする時 ・ベッド柵を取り外そうとする時 	 タッチコール
<ul style="list-style-type: none"> ・自立歩行が困難(ベッドからの離床が即転倒に結びつく) ・床に足を着く前に介助が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベッドから起き上がった時 ・ベッドから降りようとした時 	 ベッドコール
<ul style="list-style-type: none"> ・特殊なマットレスを使用している ・床敷きのセンサーを飛び越える、気にする 	<ul style="list-style-type: none"> ・自在クランプで設置の場所を変えることで、様々なタイミングでお知らせ 	 赤外線コール

※お使いになりたいセンサーがあれば、リモートサービスをご利用下さい。

ちょっとした失敗話

ある時、病院からクレームの電話が…。

内容を伺うと、床敷きのセンサーの上で患者さんが立っているのに、センサーが反応せず、いつも駆けつけた時には部屋の外にでているとのこと。

「故障?!」と思い、急いで現場に駆けつけると、なんと床に敷いてあったのは、緑色の『ベッドコール』!!

ベッドコールはセンサーに体重がかかっている時は反応しないで、かかっていた体重がなくなった時に反応するんです…(泣)

床敷きのセンサーの色は、アイボリーですので、お間違えなく!

因みにベッドコールはマットレスの上に設置し、患者さんのベッドからの起き上がり行動を知らせます。

今回は、病院様での活用事例をご紹介します! お楽しみに!